

『北海道SFアンソロジー（仮）』のコンセプト

● 対象となる作品

「固有種」か「〇〇の北限／南限」をテーマに、以下のコンセプトに則った、十勝・日高・オホーツク・上川・宗谷・留萌のうちいずれかの地方を舞台にしたSF短編小説

● 『北海道SFアンソロジー（仮）』のコンセプト

北海道。ラヴェンダーの咲き誇る雄大な大地、広い空。ゆたかな海の幸と山の幸。ヒグマ、エゾシカ、エトピリカ。

北海道。一面の銀世界、パウダースノー。山登りに川下り、キャンプと温泉。いつきても楽しめるレジャースポーツ。

北海道。先住民に対する入植者の抑圧の歴史。過酷な自然と人間の暮らしのせめぎ合い。地理的な周縁性。

北海道を語るとき、ひとは自分の頭の中にそれぞれの北海道を思い浮かべる。あらゆる分野の作品にインスピレーションを与えつづける風光明媚な観光地、その一方で530万人の生活の地でもある。アイヌの生活や文化や信仰の場であり、そのアイヌたちを追いやった和人たちが19世紀末～20世紀に開拓し築いた、あたらしいまち。札幌、旭川、帯広、函館、釧路、稚内、それぞれのまちは別の国のように異なる風景を持つ。あなたと私の「北海道」が同じものをさしている確率は、おそらく限りなく低い。

北海道とはなんなのか。誰のものなのか。アイヌ、和人、北海道出身在住者、北海道を離れた者、移住者、観光客……誰なら北海道を「正しく」語れるのだろうか。

おそらく、誰にも北海道を「正しく」語ることはできない。この苛烈で巨大なひとつの森は、人間のためにできたわけではないからだ。

「正しく」語れないのであれば、せめてできる限り真摯に、誠実に語らなくてはならない。アイヌの声が黙殺されていないか。開拓者の子孫が北海道を「故郷」と呼ぶことは許されるか。うつくしく自然豊かな地として北海道を愛する移住者はどうだろう。生活の場であり、生き物がいて、文学の生まれる土地である北海道のことを、どうやって語ろうか。

このアンソロジーは、北海道を真摯に語るためにセンス・オブ・ワンダーを用いるところみである。あなたや私の目から見た物語を並べて、比べて、書かれていないものを探して、キタキツネの足跡を追うように、北海道のかたちを探したい。